翻訳者の負債

ジャック・デリダ「バベルの塔」についての一考察

嶺村慧

1　はじめに

本稿は、ジャック・デリダの翻訳論における翻訳者像の特異性を明らかにすることを企図するものである。デリダの翻訳論は最近注目を集めているテーマであり、亀井大輔『デリダ　歴史の思考』[1]、宮﨑裕助『ジャック・デリダ　死後の生を与える』[2]、吉松覚『生の力を別の仕方で思考すること』[3]といった諸研究が立て続けに発表されている。これらの著作はいずれもデリダにおける翻訳の問題を「生き残り」[4]を核として論じるものであり、本稿もその点についてはこれらの研究に異を唱えるものではない。

しかしこれらの研究では「生き残り」と翻訳については非常に精緻な読解がなされている一方で、その翻訳の担い手たる翻訳者については考察が十分になされていないように思われる[5]。本稿は、ジャック・デリダの翻訳論「バベルの塔」において描かれる翻訳と翻訳者の関係について、ヴァルター・ベンヤミンの「翻訳者の使命」との比較を通じて二人の思想家の差異を明らかにしつつ、デリダが提示する翻訳者像の特異性に焦点を当てることを試みる。

しかしその考察の前に、生前最後のデリダの肉声に耳を

傾けることから始めたい。デリダの翻訳論の核心にある「生き残り」についてはっきりと語られているからである。

2　生を語るデリダ

二〇〇四年八月十九日、フランスの日刊紙『ル・モンド』に掲載された、「私は私自身と戦争状態にある」と題されたインタヴューは、その数週間後に逝去した哲学者ジャック・デリダの生前最後の肉声を伝えるテクストとなった。翌二〇〇五年、このインタヴューの完全版（『ル・モンド』掲載時は若干の割愛があった）が『生きることを学ぶ、終に』[6]というタイトルで出版されたが、この対談の導きの糸でもありタイトルにもなっている「生きることを学ぶ」ことに対するデリダの否定的な見解から、病に冒され、「どんなささいな身ぶりまで、切迫の色合いを帯びていた」[7]わたしたちの哲学者の「生への強い執着」[8]を読み取ることはきわめて容易である。そのような切迫の只中にあって、デリダは生をどのように語っていたのだろうか。

インタヴュアーであるジャン・ビルンバウムの、「この『生きることを知る』という欲望に関して、あなたはどんな地点にいらっしゃるのでしょう?」（AVE20）という問いに対して、この表現についての説明をした後で、デリダは「いいえ、私は〈生きることを学んだ〉ことはけっしてありません。実に、まったくないのです!」と答え、続けて「私たちは猶予中の生き残りsurvivantsです」と言っている（AVE22-23）[9]。デリダにとって「生き残り」とは、通常思い浮かべられる以上の意味をもつものである。長くなるが、本稿の課題とも密接に関わる重要な箇所と思われるので、デリダの言を引用したい。

> 生き残りsurvieの意味は、生きることおよび死ぬことに、付け加わるのではありません。生き残りは根源的です。すなわち、生とは生き残りです。普通の意味で生き残ると言えば、生き続けるという意味ですが、それはまた、死の後に生きることでもあります。翻訳についてベンヤミンは、一方における、書物が作者の死後に生き残りえたり、あるいは子供が親の死後に生き残りうるというような、死後に生き残るという意味のüberlebenと、

他方における、living on、生き続けるという意味のfortleben の区別を強調しています。私の仕事を助けてくれたあらゆる概念、特に痕跡とか亡霊的なものの概念は、構造的で厳密に根源的な次元としての「生き残ることsurvivre」とつながっていました。この次元は、生きることからも死ぬことからも、派生するのではありません。私が「根源的な喪」と呼ぶものも同様です。これは、いわゆる「現実の」死を待ちません。（AVE24-25）

何よりも特筆すべきなのは、わたしたちの生が「生き残り」であること、しかもそれは生や死を前提に考えられるようなものではなく「根源的な次元」に位置付けられているということである。二項対立的に捉えられがちな生と死の根源に生き残りがある、という図式は、前期[10]の『グラマトロジーについて』（一九六七年）でなされた、エクリチュール／パロールという対立以前にあるものとしての原―エクリチュールの議論（そこでは痕跡が重要な概念として提示されていた）において、またこのテクストのタイトルにもなっている「生きることを学ぶ」というフレーズが使用された『マルクスの亡霊たち』（一九九三年）で打ち出された憑在論の議論（そこでの主役はまさに亡霊であった）においても見出すことのできる、言わば脱構築の典型例である。デリダの言を信じる限り、彼の哲学はつねに「生き残り」と分かち難く結び付いていたのである。

ではこのようにデリダにとって根源的なモチーフである「生き残り」は、翻訳という問題とどのように関係しているのだろうか。ヴァルター・ベンヤミンの「翻訳者の使命」[11]を論じたテクスト「バベルの塔」[12]において、デリダはこのテーマについて取り上げている。次節ではまず、ベンヤミンの翻訳論において生と生き残りの問題がどのように位置付けられているのかを見ていくことにしたい。

3　翻訳と生き残り

上述の引用箇所でデリダが述べているように、ベンヤミンは「翻訳者の使命」において、原作と翻訳の関係性を述べている箇所で二つの生き残り、デリダの整理を繰り返せば「死後に生き残る」という意味のÜberlebenと、「living

on、生き続けるという意味」のFortlebenとを区別している。翻訳に関する議論の中で、何故このような生あるいは生き残りについて言及しなければならないのだろうか。まずはこの点が理解される必要があるだろう。

ベンヤミンのテクストは以下の一文から始まる。「芸術作品ないし芸術形式について考察しようとするとき、受容者を考慮することは、それらの理解にとっていかなる場合にも決して実りあるものとはならない」(AU388)。受容者を考慮する必要がないとは、つまり芸術を考察するにあたって人間を前提にする必要がないということである。その理由は、よく知られている次の一節が雄弁に物語っている。

> 芸術はそのいかなる作品においても、人間に注目されることを前提としてはいない。というのも、いかなる詩も読者に向けられてはおらず、いかなる絵画も鑑賞者に、いかなる交響曲も聴衆に向けられていないからである。(AU388)

ベンヤミンによれば、いかなる芸術作品もその受容者に向けられたものではない。芸術作品=原作がそのようなものであるとすれば、当然、翻訳についても同じことが言えるはずである。「芸術作品のほうは受容者への配慮とは無関係に成立しているというのに、翻訳は(原作の言語を読めない)読者に奉仕するというのでは論理矛盾となる」からだ[13]。ここでは翻訳は主として文学に関わるものと理解されるが、翻訳が原作を原語で読むことのできない読者のためのものではないのは、「文学の本質をなすものは、伝達ではないし、言表内容でもない」からである。「それにもかかわらず媒介しようとする翻訳は、まさに伝達を、したがって非本来的なものを媒介しうるだけだろう」とベンヤミンは述べている(AU389)。ここで言われている「媒介しようとする翻訳」とは、おそらく一般的に思い浮かべられるであろう翻訳、ある言語からある言語へ、意味内容をそのまま移し替えるような翻訳のことである。ベンヤミンにとって、翻訳の本質はそのような意味の伝達ではない。そもそも原作も翻訳も「受容者への配慮とは無関係に成立している」のである。だとすれば、翻訳とは一体いかなる

ものなのだろうか。

この問いに対する答えは、きわめて簡潔に与えられることになる。すなわち、「翻訳とはひとつの形式である」(AU389)。このあまりにも簡潔な定義を理解するために、もう一つの翻訳を参照することにしたい。この同じ一節を三ツ木道夫は「翻訳とは何かが形を得たものなのだ」と訳しているが[14]、「形式 Form」を「何かが形を得たもの」と捉えることはわたしたちの理解を大いに助けてくれる。では何が翻訳という形式として現れるのだろうか。ベンヤミンによればそれは翻訳可能性である。翻訳をこのように理解するためには原作に立ち返ることが重要であるという。「なぜなら、原作のなかにこそ、その翻訳可能性として、翻訳の法則が内包されているからである」(同)。つまりベンヤミンにとって翻訳とは、原作に内在する翻訳可能性が(翻訳という)具体的な形を得るということなのである。

そしてこの翻訳可能性については二つの問いが成り立つという。第一に、「その作品が、その読者全体のなかに信頼しうる翻訳者を見出せるのか」という問い(AU389-390)。そして第二に、「その作品はその本質からいって翻訳を許容するのか、したがって――翻訳という形式の意味に則して――翻訳を要求するものでもあるのか」という問いである(AU390)。これらの問いに対して、ベンヤミンは「第一の問いは不確定にしか解決されず、第二の問いは論証的に必然的であるといえる解決をもたらす」と言う。第一の問いが「不確定にしか解決され」ないということは経験的にも容易に理解し得るだろう。ここで重要なのは無論第二の問いである。ある作品=原作にとって卓越した翻訳者が現れるかどうかは本質的なことではない。作品=原作が、それが内包する翻訳の法則、すなわち翻訳(の出現)を必然的なものにする翻訳可能性をもっているということが本質的に重要なのである。

右に見た第二の問いがもつ「独自の意味」について、「ある種の関係概念は、初めから人間だけに関連づけられるのではないとき、その優れた意味を、それどころかおそらく最良の意味を保持する」とベンヤミンは指摘する(AU390)。ここで「ある種の関係概念」とは原作と翻訳の関係を指していると思われるが、それが最良となるのは人間以外の何と関連づけられるときなのか。ベンヤミンに

よれば、それは神である。引用しよう。

だからこそ、たとえすべての人間が忘れてしまったとしても、ある忘れがたい生ないし瞬間について語ることができるのだ。すなわち、その生ないし瞬間の本質が、忘れられることがないようにとみずから要請しているのであれば、忘れがたいというあの賓辞はいかなる偽りも含むことなく、人間には応えられないひとつの要請を、また同時に、おそらくそれに応えているはずの領域への、つまり神の記憶への指示を含むことになるだろう。（AU390）

生の忘れがたさについてはあまりにも唐突ではあるが、この一節をデリダは次のように読解している。

このように他者を翻訳者として要請するという事態を、ベンヤミンは生の忘れがたい瞬間にたとえる。〔……〕忘却がこの忘れがたいものを襲うとしても、それは偶発事にすぎない。忘れがたいものの要請――それはここでは構成的なものである――は記憶の有限性によってもまったく傷つけられない。同じく翻訳の要請も、それが満足させられないことにいささかも苦しむことはない。少なくとも作品の構造そのものとしてのかぎりでは苦しむことはない。（Psy302）

生の忘れがたさを語ることでベンヤミンが言わんとしていたのは、デリダが言うように、翻訳可能性という作品＝原作の本質が翻訳を要請するという構造は、人間の忘却によって揺るがされることはないということ、すなわち神（が記憶すること）によって保障されているということであろう。

それにしても何故生なのか。ここにベンヤミンの翻訳論における要点の一つがある。作品＝原作と翻訳の関係について、ベンヤミンは次のように述べている。

翻訳は、それがいかに優れたものであろうと、原作にとって何かを意味しうるわけでは決してないことは明らかである。にもかかわらず、翻訳は原作とその翻訳可能性

によって密接な連関のうちにある。それどころかこの連関は、原作そのものにとってもはや何も意味しないだけに、よりいっそう密接なのだ。この連関は、自然的な連関、もっと厳密にいえば生の連関と呼んでもいい。（AU391）

ここではよりはっきりと生のアナロジーが用いられている。例えば、わたしたちが生きている限りわたしたちの心臓は動き続け、その動静は心拍数という姿をもって現れる。それは生がもつ可能性が具体的に「形を得たもの」にほかならない。わたしたちが生きているということの具体的な証の一つとして心拍数というものは理解されうるのである。

しかし心拍数は生のもつ可能性の顕われでこそあれ（言うまでもなくそれは生と切り離せない）、それ以上のものではなく、生（個々人の人生という意味のそれでは無論ない）に対して働きかけをするものではない。生の連関とはこのように理解し得るものだが、作品＝原作と翻訳の間にもこのような関係が成り立つというのがベンヤミンの主張である[15]。そして続く箇所で、ベンヤミンは生き残りについて言及する。

生の顕われが生あるものにとって何も意味することなく、その生あるものときわめて密接に連関しているのとちょうど同じように、翻訳は原作に由来する。しかも、原作の生というより、その「生き残る生 Überleben」に由来する。というのも、翻訳は原作より後からやってくるものであり、それが成立した時代には決して選り抜きの翻訳者を見出すことのない重要な作品においては、翻訳はその作品の生の持続 Fortleben の段階を示すものだからである。芸術作品の生とその死後の生という考え方は、メタファーとしてではなく、まったく文字通りに理解されなければならない。（AU391）[16]

ベンヤミンは芸術作品にも「文字通り」の意味の生とその持続とを見出している。そして有機体だけではなくあらゆる存在に生を認めることによってはじめて、「生の概念はそれにふさわしい権利を獲得することになる」という。「なぜなら、自然によってではなく、ましてや感覚や魂と

いった曖昧な現象によってではなく、最終的には歴史によってこそ、生の圏域は規定されるからである」（AU392）。ベンヤミンは原作の生を歴史と結び付けているわけだが、そのことによって「作者と言う有機体の『死』によって限られることのない『生命』が考えられていることになる」[17]。有機体において見て取られるような死という明確な終わり＝区切りが芸術作品にはない（あるいは有機体と同じかたちで生の終わりとしての死が見出されない）とすれば、「作品の生の持続は、被造物の生の持続よりも、比較しえないほど容易に認識できるのではないだろうか」とベンヤミンは言う（同）。

さらに、「偉大な芸術作品の歴史は、源泉に由来するその素性と、作者の時代におけるその形成と、そしてそれに続く諸世代のもとでの、原則的には永遠の生の持続という時期とを知っている」と続ける（同）。自身ベンヤミンのテクストの翻訳者でもある三ツ木道夫によれば、こうした「偉大な芸術作品」の生の持続＝歴史の三段階を「ふたつに分けて考えるのが〔一般的な〕成立史・受容史の考え方である」という。前二つ、すなわち「現在から見ればすでに過去の出来事」となっているのが作品の成立史の、そして作品の成立とは無関係な三つ目の段階が受容史の時期であり、後者は「原理的には終わりのない」時期である。作品の成立を起点とするこのような時期区分に立脚するなら、成立史としての作品の歴史は「原作者が最後の一行を書き上げた時点で」終わり、作品は作者の手を離れ、「以後は同時代にせよ、後世にせよ、受容する側のみが形成していく歴史に過ぎない」ものとなる。つまり、「作者と受容者という対概念に依拠する限り、原作の『生命』の連続はここで途絶えてしまう」のである[18]。

ここに至って、ベンヤミンが「芸術作品ないし芸術形式について考察しようとするとき、受容者を考慮することは、それらの理解にとっていかなる場合にも決して実りあるものとはならない」と述べたことの意味もあらためて明確となるだろう。ベンヤミンが「厄介な」受容者を切り離したのは、「作者の死後、作品が読み継がれ翻訳され続けるのは、受容者の意志や主観によるのではなく、変転を通じて生き延びる作品の生命のなせる業」であることを示すためだったのである[19]。芸術作品＝原作の本質としての翻訳可

能性は、その作品の生、生き残り持続する生なくしてはありえない。デリダも言うように、翻訳と生き残りは「本質的な関係にある」のである（Psy297）。

以上で、ベンヤミンの翻訳論において、生き残りが必要不可欠なファクターとして要請されることの必然性が明らかとなった。ここまでの議論を踏まえてわたしたちは、翻訳者の問いについて、翻訳者の使命について考察していかなければならない。

4　翻訳者の使命とは何か

前節ではベンヤミンの翻訳観を生き残りに焦点を当てながら概観したが、翻訳者についてベンヤミンはどのように考えていたのだろうか。このことを理解するためには、ベンヤミンにとって翻訳とは何か、ということがあらためて問われなければならない。

「偉大な芸術作品」の死後の生についての議論のなかで、ベンヤミンは「この死後の生が世に現れた姿こそ名声にほかなら」ず、「媒介以上のものである翻訳は、死後の生のなかで作品がその名声の時代に到達したときに成立する」と言う（AU392）。そして、「翻訳において、原作の生はそのつねに新しく最終的な、最も包括的な発展段階に到達する」とされる（AU392-393）。ベンヤミンの翻訳観において特異なのは、翻訳が原作に対して何も意味しないとされる一方、翻訳がなされることで原作の生が更新され、より高みへと進んでいくとされていることだろう。このような、より高次な段階を目指していくという目的論的な翻訳観をとるなら、当然翻訳は意味の伝達などではなくなる。だとすれば、ベンヤミンの翻訳が目指すものとは一体何か。

ベンヤミンによれば、このような「発展は、ある独自な高次の生の発展として、ある独自な高次の合目的性によって規定されている」（AU393）。つまり翻訳とは、「究極的には、諸言語間の最も内的な関係の表出に対して合目的である」という（同）。この「諸言語間の最も内的な関係」について、ベンヤミンは次のように説明している。

> 諸言語間の最も内的な関係は、独自な収斂の関係にほかならない。その実質は、それぞれの言語が互いに無縁の

ものではなく、アプリオリに、一切の歴史的な連関とは無関係に、諸言語が言おうとしていることにおいて互いに類縁性をもっているという点にある。（AU394）

ここで示唆されているのは、ドイツ語と日本語のように歴史的なつながりがない言語同士でも、言おうとしていることの類似性、すなわち言語の差異に関係なく目指されている究極の意味のようなものが存在するということである。諸言語はどこに、何に向かって収斂していくのか。ここが「翻訳者の使命」というテクストの核心である。引用しよう。

諸言語間のあらゆる歴史を超えた親縁性の実質は、それぞれ全体をなしている個々の言語において、そのつど一つの、しかも同一のものが志向されているという点にある。それにもかかわらずこの同一のものとは、個別的な諸言語に達せられるものではなく、諸言語が互いに補完しあうもろもろの志向の総体によってのみ到達しうるものであり、それがすなわち〈純粋言語〉なのである。（AU396-397）

各言語は、「あらゆる個々の要素、つまり語、文、文脈が互いに排除し合う」ような関係にある（AU397）。ベンヤミンは「パン」を意味するドイツ語のBrotとフランス語のpainを例に挙げ、これらは志向の仕方こそ異なるものの、志向されている内容は同一であり、志向する仕方が「志向されるものに向かって互いに補完しあう」ことで（同）、最終的には様々な志向の仕方が調和することで純粋言語が現れると言う。

ベンヤミンはこの純粋言語について、「みずからはもはや何も志向せず、何も表現することなく、表現をもたない創造的な語として、あらゆる言語のもとに志向されるもの」と説明しているが（AU407）、それはあらゆる言語を可能ならしめ、あらゆる翻訳を必然的なものにする究極の根拠であり、かつあらゆる翻訳が目指す究極のテロスである。翻訳の目的がこのようなものであるとすれば、翻訳者の使命とは次のようなものとなる。

異質な言語の内部に呪縛されているあの純粋言語をみずからの言語のなかで救済すること、作品のなかに囚われているものを言語置換Umdichtungのなかで解放することが、翻訳者の使命にほかならない。（AU407-408）

翻訳者の使命とされるUmdichtungは改作を意味する言葉であるが、デリダが言うように「詩的な移し替え」と解釈してよいだろう（Psy310）。ベンヤミンによれば、翻訳者に要請されるのは逐語性、すなわち原作の意味への忠実ではなく形式（シンタックスも含む）への忠実である。「翻訳作品から言語の補完への大いなる憧れが語り出ることこそ、逐語性によって保証される忠実というものの意義」であるという（AU405）。そしてこの文脈において、ある印象的な形象が語られるのである。

つまり、ひとつの器のかけらを組み合わせるためには、それらのかけらは最も微細な部分に至るまで互いに合致しなければならないが、だからといって同じ形である必要はないように、翻訳は、原作の意味にみずからを似せるのではなくて、むしろ愛をもって細部に至るまで、原作のもっている志向する仕方を己れの言語のなかに形成しなければならない。そうすることによって原作と翻訳は、ちょうどあのかけらがひとつの器と認められるように、ひとつのより大いなる言語の破片として認識されうるようになるのである。（AU404-405）

この壊れた器の比喩によってベンヤミンが言おうとしているのは、まさしくバベル以降の、唯一の言語を失い翻訳を余儀なくされたわたしたち人間の、否わたしたち翻訳者のあるべき姿ではないだろうか。翻訳者の使命なるものは、バベル以前には存在しようがない。彼の議論は「バベル以降」を暗黙の前提としていると言えるだろう。だとすれば、改めてその前提に光を当てることで見えてくるものもあるはずである。ここでわたしたちは、デリダの読解を見ていかなければならない。

5　バベルの塔

デリダは「バベルの塔」というテクストを、ベンヤミンの読解からではなく、タイトルにもなっている『旧約聖書』の神話の読解から始めている。前節の最後でも確認した通り、ベンヤミンの議論が「バベル以降」を前提としていることを踏まえると、このことはきわめて重要でありかつ必要な作業である。具体的にその議論を追っていくことにしよう。

冒頭、デリダは「バベル――それは何よりもまず一個の固有名 nom propre である」と言う（Psy282）[20]。ここでのキーワードは固有名である。固有名を翻訳の文脈で考えようとするとき、まず考えられるのは、固有名は翻訳不可能であるということである。デリダが挙げている例を借りれば、Londres というフランス語が London の翻訳ではないように、固有名は翻訳することができない。バベルもまずもってそのようなものとして現れる。しかしバベルは単なる固有名詞ではないという。どういうことだろうか。

ここではまずバベルという固有名の言語的な所属が問題になっている。「言語の問いがどの言語で立てられるか、翻訳についての言説がどの言語で翻訳されるかは、決して黙過してはならない問いだろう」とデリダは言う。したがってバベルについての第一の問いは、「バベルの塔はいかなる言語において構築され、そして脱構築されたのか」というものになる。そしてその答えは、「バベルという固有名が混同のせいで『混乱』と翻訳されえたようなある言語の内部においてである」という（Psy283）。バベルという言葉に何が起こったのか。デリダは続けて言う。

> バベルという固有名はそれが固有名詞であるかぎりで翻訳不可能にとどまらねばならないのに、ある言語においてのみ可能だった一種の連想上の混同のせいで、ひとはこの言語そのもののなかで、われわれが混乱と翻訳するものを意味する普通名詞によって、それを翻訳できると思い込んだのだった。（同）

デリダは詳しく説明していないが、背景にあるのは、アッカド語のバベルという語が元々は「神の門」という意味の普通名詞であり、それがヘブライ語の「混乱」を意味する語と混同されてしまったという事態である[21]。バベルと

は固有名でありかつ普通名詞でもあるという混乱が生じているのである。

バベルがもつ意味はそれだけではない。デリダはヴォルテールの『哲学辞典』の「バベル」の項目を引用して、バベルが父なる神の都という意味をもつこと、さらには二つの「混乱」、すなわち人々が「野望を打ち砕かれて狼狽」し「言語が混乱したこと」[22]を表すことを確認する（同）。しかしヴォルテールが示唆するのは「混乱」の二重性だけにとどまらないとして、デリダはさらに次のような論点を引き出す。

すなわちバベルは二重の意味で混乱＝狼狽を言わんとするばかりでなく、また父の名をも、もっと正確に、そしてもっと一般的に言えば、父の名としての神の名をも言わんとしている、と。つまり都市は父なる神の名を、それも混乱と呼ばれる都市の、その父の名をもつ、というのである。神が、神というものが、ある共同体の空間――人々がお互いをもはや理解しあえないあの都市――にみずからの父性的な名を刻印したというわけである。（Psy284）

こうして、バベルという語がもつ目も眩むような多義性が明らかとなる。人々を罰するために与えられた父である神の名としての、「諸言語の起源の名」としてのバベル（同）。訳者の藤本一勇は、神の名＝固有名詞 nom propre であるバベルが混乱＝狼狽を表す普通名詞 nom commun に翻訳されることで、「社会や世界を共通なもの・共同的なものへと結集させる『父』の名、『神』の名ともなり、まさしく commum（共同体的）なものとして機能している。その点で『バベル』は単に『混乱』ではない」と指摘しているが[23]、言語の混乱によって相互の意思疎通が不可能になった人々を離散させると同時に、言語の混乱にもかかわらず人々をその名において結集させるという、バベルという名の二重性は強調される必要があるだろう。それはまた、翻訳の起源でもあるからだ。

ヤハウェは翻訳を課すと同時に禁じる。翻訳を課すとともに禁じるとは、その後ヤハウェの名を担うことになる

子どもたちは翻訳を強いられるが、しかしその翻訳は必ず失敗するように強いられているということである。（Psy288）

ここで言われているのは翻訳のダブル・バインドである。言語の分散により、バベル以降の人間は、異なる言語をもつもの同士の意思疎通に際しては、必ず翻訳を介さなければならない（翻訳が強いられる）。しかし、完全な翻訳は人間には最初から不可能であるために、翻訳の試みは必ず失敗に終わらざるをえない。デリダがバベルの神話に見出したのは、翻訳者の置かれた状況の原型であると言ってよいだろう。固有名詞にして普通名詞でもあるバベルという言葉は神の名として、不可能な翻訳へとひとびとを従わせる法として与えられていた。「翻訳は法、義務、負債となるが、この負債はもはや返済しえないほどのものである。このような弁済不可能性がバベルの名にはじかに刻印されている」のである（Psy293）。

以上見てきたように、デリダのバベルの神話読解が示していたのは、翻訳という営為の原風景とも言うべき場面であると考えられる。固有名＝バベルを「原作」と置き換えてみると、それはベンヤミンの翻訳観と重なるように見える。原作からもたらされる翻訳可能性という法則に拘束される翻訳者が、失われた純粋言語を目指して、つねに原作の生を更新し続ける不断の運動としての翻訳に従事する。しかしそのような営みの完成は人間には許されておらず、不可能な試みである。したがって翻訳とは、不可能なものとしてのみ可能である――このように言えば、いかにも「デリダらしい」翻訳観となるだろう。しかし、デリダが語る翻訳者像は、ベンヤミンのそれとは大きく異なっている。最後に、デリダが翻訳者をどのように捉えていたか、負債という語をキーワードに見ていくことにしたい。

6　翻訳者と負債

翻訳という弁済不可能な負債について、デリダはベンヤミンのテクストのタイトルを考察しながら次のように述べている。

ベンヤミンは翻訳の使命ないし課題とは言っていない。彼は翻訳の主体を名指しているのであり、それを負債を抱えた主体として、ある義務を負った主体として名指すのである。すなわち、すでに遺産相続者の立場に置かれた主体、ある系譜のなかで生き残った者として書き込まれた主体、すなわち生き残った者あるいは生き残りの推進者として書き込まれた主体、これを名指すのである。（Psy299）

ところで、ベンヤミン自身は負債という言葉を使っていない。この言葉の含意を理解するためには、それがどのように構成されるのかを確認する必要がある。まず翻訳者と負債の関係性についてだが、翻訳者が「原作の贈与と所与に従属した、負債を抱えた受取人」でしかないのかといえば、そうではない。「負債の絆もしくは責務は贈与者と受贈者とのあいだではなく、二つのテクスト（二つの『生産物』もしくは二つの『創造物』）のあいだで成立するからである」（Psy299）。これは、作品＝原作がもつ本質としての翻訳可能性が、その形式として翻訳を要求するというベンヤミンの議論の通りであるが、であれば、翻訳者の負債が生じる余地があるのだろうか。デリダは次のように読解する。

ベンヤミンが受取という観点を拒否するとき、〔……〕彼は何よりもまず、彼がいまだに「原作」と呼ぶものの審級に戻りたいのだ。それはこの審級が受取人ないし翻訳者を生み出すからではなく、この審級が法を措定することによって受取人ないし翻訳者を必要とし、召喚し、要求し、司るからである。そしてここでもっとも特異だと思われるのは、この要求の構造である。この要求は〔……〕形式を通じてなされ、さらには形式によって表明されるように思われる。（Psy300-301）

すでに見たように、原作が措定するところの法について二つの問いが出されるわけだが、翻訳に関する問いが「論証的に必然」とされていたのに対し、翻訳者に関する問いは「不確定にしか決定されない」というのがベンヤミンの議論であった。

翻訳者の問いは「蓋然的」であり、翻訳の問いは「ア・プリオリ」である。「たとえ原作の構造そのものに内在する要求にして欲望でもある厳命に応えることのできる翻訳者がそこに存在しないとしても、原作は翻訳を要請する」とするなら（Psy302）、翻訳者の負債があるとしてもそれは通常考えられるような負債ではない。

これは奇妙な負債であり、誰を誰に結びつけるのでもない。作品の構造が「生き残り」であるならば、負債は原テクストの主体―著者と目された者――死者もしくは死すべき者、テクストの死者――の許へと拘束するのではなく、原テクストの内在性における形式の法という他のものへと拘束するのである。（Psy303）。

ここでも繰り返し「形式」が強調されている。そしてこれも繰り返しだが、翻訳とは原作の再現や再生ではない。であれば、

次に、この負債は写しあるいはよい似姿を、すなわち原作の忠実な再現を復元することへと拘束するのではない。生き残るものである原作それ自身が変容の過程のなかにあるのだ。原作はみずからを変更することによってみずからを与えるのであり（この贈与は所与の対象にかかわるものではない）、変異において生き、生き残る。（Psy303）。

翻訳の生き残りにとって、やはり翻訳者の存在はあくまで二次的な、蓋然的なものにすぎないようにも見える。しかしデリダは、「標記したかったことは、むしろ、あらゆる翻訳者は翻訳について語る立場にあり、第二のもしくは二次的などではいささかもない地位にあるということである」と言う（Psy304）。なぜなら負債をもつのは翻訳者だけではないからである。

翻訳せよという要請が原作の構造に刻印されているとすれば、原作のほうもまた、法をなすことによってそもそもの始めから翻訳者に対して負債を抱え込むからである。原作が第一の負債者であり、第一の依頼者なのだ。原作

は欠如することから始まるのであり、翻訳を懇願することから始まるのである。(Psy304-305)

ここにデリダの翻訳—翻訳者観がはっきりと表れていると言えるだろう。翻訳者もまた、作品=原作の翻訳可能性からア・プリオリに要請されているのである。

7　おわりに

ベンヤミンにおいて翻訳は、諸言語間での意味の運搬・再現であるようなものではなく、純粋言語へと向かう目的論的なものとして規定されていた。それはまさしくアントワーヌ・ベルマンも言う通り「言語の形而上学」と呼ぶべきものであるだろう。このような形而上学としての翻訳とは、その「客観性が保証されているのは、神のうちにおいてである」[24]ような翻訳である。そして翻訳者の使命とは、各言語を純粋言語へと向かわせることのうちにあるとされた。

しかしデリダの翻訳及び翻訳者はベンヤミンのそれとは大きく異なっている。デリダにとって、翻訳の客観性を保障するものなどどこにもない。翻訳とは絶対的な準拠なきものなのである[25]。翻訳者は、つねに十全な翻訳が不可能な不安な状況に置かれたまま、翻訳し続けなければならない。負債を負った翻訳者の使命とはこのようなものであるだろう。

負債が弁済不可能なほど巨大なものであるとされる以上、翻訳者は、翻訳者であるにもかかわらず翻訳が不可能であるという、進退窮まる状況に陥ってしまうようにも見える。それにもかかわらず、おそらく希望は残されている。デリダは次のようにも言っている。「翻訳とは経験 expérience である、と言おう。これはまた次のように翻訳もしくは経験される。すなわち、経験とは翻訳である」と(Psy327)。expérience という語をさらに翻訳してみたい。この語には経験以外に試練・試験という意味があり、語源的に見れば「外へ貫くこと」を含意する語でもある。翻訳は紛れもない試練であると同時に、「外へ」、すなわち原作というテクストを全く新しい可能性へと開くような契機にもなり得る。「翻訳とは経験である」とは、このように翻訳し得

るのではないだろうか。

バベル以降の翻訳者であるわたしたちに許された翻訳とは、もはや完成図のない何かの破片を造り続けるような、無限の徒労に似たものなのかもしれない。まさしく試練である。しかし、そうして造り出された破片たちが、誰も想像していなかったような仕方で結び付いたとき、原作は変容し生き残っていくのではないか。であれば、「生き残りの推進者」である翻訳者の使命とは、テクストに変形的な読解を試み続けることであるだろう[26]。

註

（1）亀井大輔『デリダ　歴史の思考』法政大学出版局、二〇一九年。「補論」にてデリダの翻訳論が論じられている。

（2）宮崎裕助『ジャック・デリダ　死後の生を与える』岩波書店、二〇二〇年。

（3）吉松覚『生の力を別の仕方で思考すること』法政大学出版局、二〇二一年。

（4）デリダのテクストにおいては、次節でも見るように「生き残り」あるいは「生き残ること」を表すために、名詞の survie と動詞の survivre がともに使用されている。本稿ではこの二つの語が指し示すものを、「生き残り」と言い表わすことにする。「生き残ること」という表現では、主体の意図の下でなされる能動的な動作のニュアンスが出てしまうと考えられるからである。後で見るように、デリダにとって「生き残り」とはわたしたちの生の根源的な様態である以上、何らかの動作を思わせるような表現は避けられるべきだと判断した。

（5）宮崎裕助は翻訳を遺産相続と捉え、遺産相続者＝翻訳者について述べている。前掲書、一二頁以下参照。

（6）ジャック・デリダ『生きることを学ぶ、終に』鵜飼哲訳、みすず書房、二〇〇五年。以下この著作からの引

用に際しては、本文中で（AVE ページ数）のかたちで記すことにする。特に断りがない限り、引用中の強調はデリダによるものである。また、訳文は変更した箇所がある。

（7）インタヴュアーのビルンバウムの序文より引用。「喪を宿す　子供としてのデリダ」、『生きることを学ぶ、終に』、四頁。

（8）訳者である鵜飼哲の言。「リス＝オランジス　二〇〇四年八月八日」、『生きることを学ぶ、終に』、七一頁。またこの論考は以下の著作にも収録されている。鵜飼哲『ジャッキー・デリダの墓』みすず書房、二〇〇四年。

（9）引用中の「生き残り survivants」という語は生存者、すなわち生き残った者の意である。

（10）宮﨑裕助はデリダの思想を、初期・前期・中期・後期・晩期の五段階に分けているが、本稿でデリダの著作の大まかな時期区分について言及する際は、この図式を踏襲している。宮﨑前掲書、二一頁以下参照。

（11）ヴァルター・ベンヤミン「翻訳者の使命」、『ベンヤミン・コレクション2』浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、一九九六年。引用に際しては本文中で（AU ページ数）のかたちで記すことにする。なお、以下の邦訳も参考にした。「翻訳者の課題」、三ツ木道夫編訳『思想としての翻訳』所収、白水社、二〇〇八年。

（12）ジャック・デリダ「バベルの塔」、『プシュケー　他なるものの発明Ⅰ』藤本一勇訳、岩波書店、二〇一四年。引用に際しては本文中で（Psy ページ数）のかたちで記すことにする。特に断りがない限り、引用中の強調はデリダによるものである。また、訳文は変更した箇所がある。

（13）三ツ木道夫「W. ベンヤミンの翻訳思想」、『通訳翻訳研究』9号、二〇〇九年、一八四頁。本稿のベンヤミンのテクスト理解については、この論考に負うところが大きい。

（14）三ツ木道夫訳「翻訳者の課題」、前掲、一八八頁。

（15）例えば、Walter Benjamin の *Die Aufgabe des Übersetzers* というテクスト＝原作は、それに内在する翻訳可能性によって、モーリス・ド・ガンディヤックによるフランス語訳 *La tâche du traducteur*（「バベルの塔」でデリダが用いている）や日本語訳「翻訳者の使命」といった各種の翻訳をもつ。

（16）ちくま学芸文庫版では Überleben を「存える生」、Fortleben を「死後の生」と訳しているが、ここでは三ツ木訳を参照して前者を「生き残る生」、後者を「生の持続」と変更した。これ以降の引用箇所も同様の変更を加えてある。

(17) 三ツ木前掲論文、一八六頁。
(18) 前掲論文、一八六頁。
(19) 前掲論文、一八七頁。
(20) nom propre は「固有名詞」のことである。
(21) 吉松覚『生の力を別の仕方で思考すること』、一四八頁。
(22) フランス語の動詞 confondre は「混同する」以外にも「驚愕させる・困惑させる」、「打ち砕く」という意味をもつ。
(23) 『プシュケーI』、六五七頁、訳注（2）。
(24) ヴァルター・ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」、『ベンヤミン・コレクション1』浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、一九九五年所収、二七頁。
(25) ジャック・デリダ『たった一つの、私のものではない言葉』守中高明訳、岩波書店、二〇〇一年、一一六頁。
(26) 初期のインタヴュー『ポジシオン』においてデリダは、マルクスのテクストを読むことについての議論のなかで、「読解は変形的なのです」と語っていた。ジャック・デリダ『ポジシオン』高橋允昭訳、青土社、二〇〇〇年、九四頁。

（みねむら　けい／博士後期課程）